

四谷の

千枚田だより

景観環境整備



第 110 号



保存会は連谷お助け隊の協力を得て例年、春と秋の二回、「千枚田入り口付近とふれあい広場」の草刈り作業を実施している。

九月三十日、連日の天候不順で稲刈り作業が大幅に遅れているにも関わらず総勢三十八名の出役があり、二班に分かれ草刈り作業を行った。会員は日頃、急傾斜地の草刈りを行っていることから要領もわかまえており、作業効率抜群で無事終了した。「四谷の千枚田だより」に皆さんもご協力いただければととても嬉しいです。」と呼びかけたところ名古屋市緑区の渡辺さん家族六名が駆けつけ、会員共々善い雰囲気を醸し出した。思うに「四谷の千枚田」は百姓には厳しい条件の下であるが都市住民には癒しの場であり、素晴らしいとか誉め言葉はよく聞くが、誰が保全管理をしているか、今一度考えて頂きたい。例えばトイレの後始末とかコンビニ弁当の空箱を放置しないなど、癒された心に感謝する気持ちがあるなら、少しでも、気を遣って頂けると有り難い。

イノシシの被害

今年の千枚田は獣害で惨憺たるものであった。

一時は田んぼの回りに電気柵を設置することでイノシシの侵入を回避できたがイノシシもあの手この手を使い田んぼを荒らし回った。



荒らされた田んぼ



ぶち破られたトタン

「あの手この手」①人間でも躊躇する険しい沢伝いに上り、石崖で張りつらい電気柵のわずかな隙間を見つけ、侵入。②張り巡らしたトタンや魚網をぶち破り侵入。③一度入った田んぼは連続して入る等々。

「おかしなイノシシ」九月に入り千枚田の一角、大向から十王堂付近に得体の知れないイノシシが日夜出没。愛嬌もあるが、悪さをして皆を困らせたり脅かされたりした。

事の始まりは前沢さんや伸ちや、鍛冶屋の家の庭に遊びに来た。そのうち皆が稲刈りをしていると電気柵の向こうで皆の仕事振りを見ているうちにこっくりコックリ居眠りを始めたりする。また、竹の棒でシヨイシヨイと追ったり、火花を穴ペッタにしゃつけても逃げるでも襲いかかるでもなく悠然としている。始めのうちは老齢で、「認知症」などと表げていたが、悪さはすばしこく沢は跳び越す、電気柵はぶちこぎるなどして田んぼに侵入。稲は食べる、ぬたは打つ、ハザはすっこくなど悪行三昧。ほとほと手の焼けるイノシシであった。思うに、野生イノシシではなくパークシヤ系の交配種(顔かたち)、イノブタが舎から逃げ出したものと個体の馴れ馴れしさから推測、現在のイノシシの拡大要因を実証する出来事であった。

稲刈り

・新城高校農業クラブ

九月二十二日、県立新城高校農業クラブ(二十二名)は原田英史(理事)の指導により稲刈り、ハザ架けを行った。三十日午後七時、豊橋に上陸した台風十七号は列島を縦断。生徒達が作ったハザも強風で倒れてしまったが翌日には地元の人々の心ある皆さんによりハザを作り直していただいた。



・連谷小学校

九月二十六日、校外学習「ホットもつと千枚田」の稲刈りを行い、終了後は沢で魚獲りつるつるの石を拾って楽しんだ。また、刈った稲は学校に運びハザ架けをした。

・こども農学校

九月二十九日、愛知東農協主催によるこども農学校(六十五名)の稲刈りが高橋庄一(顧問)の指導で実施された。

連谷地区大運動会

九月二十九日、校区の各種団体の参加の下、大運動会が開催された。プログラムの中、全校児童五名による組み体操が行われた。大きな児童は腰を落とし、小さな児童は背伸びをしての見事なバランスと数々の演技に校区民から惜しみのない拍手が燃え上がった。



出店

棚田っ娘は地元海老神社の祭典に湧き水・天日干しで栽培した「ミネアサヒ」の五平餅を販売。好評を得た。



余談

ここ、数年美味しい米を作る意欲からススキなど、干草を田んぼに入れるようになった。昔の人は稲刈りが済むと干草刈りに勤しみ、刈ったススキは「ズンボ」にして保存、晩秋に田んぼに搬入した。このズンボにはそれなりの訳がある。その訳は生草だと窒素分が多く含まれ、枯らすことにより窒素が抜ける。ドイツなど環境先進国は農作物栽培(食用)

に窒素はタブーであると聞く。

干草は稲作栽培に有機質の補充として重要な役割を担っているが、一つ、心配の要素がある。それは、近隣において「野ビル」の異常発生があり、その草を搬入した場所で拡大の事例がある。このことから、他地区からの落ち葉や枯れ草の搬入にはよほど気を付けてもらいたいと思う。

総代視察

十月十七日、安城市「油ヶ淵悪水土地改良区」の新旧総代会二十五名の皆さんが訪れます。

棚田サミット

十月十九日〜二十日、熊本県山都町で開催。鞍掛山麓千枚田保存会から今泉雅男 高橋孝行 松下 誠 村雲伸一 原田英史 小山舜二が参加する。

連絡会議

十一月一日、ふるさと水と土指導員連絡会議が岡崎市ホテル学校で開催。林義明・原田英史・小山舜二が出席する。

行 平成二十四年十月十五日

鞍掛山麓千枚田保存会

発 文 責 小山舜二